



TITLE:

貨幣の本質とその価値(上) - 高田博士に答ふ -

AUTHOR(S):

中山, 伊知郎

CITATION:

中山, 伊知郎. 貨幣の本質とその価値(上) - 高田博士に答ふ -. 経済論叢
1938, 46(4): 511-528

ISSUE DATE:

1938-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131087>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 四 號 第 四 十 六 卷

昭和十三年四月一日發行

論 叢

ソロキンの文化的變動形式論

貨幣の本質とその價值

貨幣の本質について

共同體思想の國民的性格

時 論

稅制整理と増稅

研 究

職分と職業

貿易理論の前提

ダンピングの理論

近世絞油業の發達

說 苑

明治初期の國內市場

産業構造の研究と政策

附 録

雜 報：外國雜誌論題

(禁 轉 載)

文學博士 米田庄太郎

商學士 中山伊知郎

文學博士 高田保馬

經濟學博士 石川興二

經濟學博士 汐見三郎

經濟學士 澤崎堅造

經濟學士 松井清

經濟學士 岡倉伯士

經濟學士 住谷勇二

經濟學士 堀江保藏

經濟學士 田杉競

貨幣の本質とその價值（上）

——高田博士に答ふ——

中山伊知郎

高田博士は最近の經濟論叢（第四十五卷四號）に『貨幣本質に關する若干の問題』を公にせられ併せて私見に對する批判を發表された。私は博士の不斷の高教に深謝すると共に喜んでこゝに與へられた御答への機會をつかみたいと思ふ。即ち以下に於て私の志すところは單なる私見の擁護ではない。むしろこの機會に一面に於ては私見の敘述の不足を補充し、他面に於てはこれと直接の關係を保ちつゝ一層廣き問題の展望に導くことこそ私の希望に外ならぬ。尙本文は去る十二月二十二日東京に開催された日本經濟學會に於ける研究報告を基礎とするものである。その際進んで討論に参加された丸谷・坂本・荒木・赤松・宮田・栗村・水谷・福井・大熊・杉本の諸氏に對してはこの機會に感謝の意を表したい。

一

貨幣の本質とその價值とに就いて私は曾て大凡次のやうに述べた。

『貨幣の本質は交換の手段である。しかしこの交換の手段と云ふ意味は決して單に交換の便宜のために存在することを示すものではない。通常貨幣は物々交換の不便をさけるために發明されたものと説明せられ、又如何なる財がかゝる交換手段として適當であるかが論ぜられてゐる。吾々は貨幣のかゝる發生史的な説明が現實の貨幣形態の理解に貢獻すべきことを認める。けれども吾々はここに貨幣の本質を見ることは出来ない。何故なれば貨幣を以てかゝる便宜的存在と見る立場からは貨幣に關する重要な諸問題は少しも解明せられないからである。かくて吾々が貨幣を以て交換の手段であるとするこの眞意は、簡單に云へば之を以て交換と同時に成立するもの或はその意味に於て交換をそもそも可能ならしめるものと見ることに外ならない。』

『凡そ交換の起る一般的の前提は交換せられる財について交換當事者たる經濟主體の評價が互に異なることを要するものである。即ち交換する各個の經濟主體の立場からすれば、交換する諸財の價值を何等かの標準によつて比較することが交換の存在のためにも又交換の限界の存在のためにも必要である。この標準は一應は各經濟主體に於てそれぞれ異なる財であつて差支へない。けれども結局に於て一般的な交換の限界が確定せられるためには交換當事者に共通なる尺度を用ひることが必要とされる。これ所謂計算單位としての貨幣であつて現實の貨幣はかゝる計算單位を以て表現せられた交換を完了せしめるためのもの、すなはち交換手段に外ならない。交換を中心としてこの關係を表現すればそれは價值の比較——計算貨幣——貨幣と云ふ三段の連鎖となるものであつて吾々が貨幣を以て交換の手段であるとするのはこの最終の段階を指すものである。或ひは交換手段としての貨幣は論理的にそのまへに計算單位としての貨幣の段階をもたねばならない。さうしてこの認識は貨幣の本質を理解するために根本的なものである。』¹⁾

この貨幣本質觀は貨幣を交換の手段であると見る點に於て決して遠く通説を離れるものではない。唯問題は交換手段と云ふものの意味を更に規定して之を計算貨幣を實現するものとした點にある。換言すれば交換手段一般は未だ貨幣の本質をなすものではなく、計算單位を實現するものとしての交換手段のみが貨幣の本質をなすと云ふのが要點である。私が交換手段の意味をかやうに規定したのは上述によつても既に明白なやうに、何よりも貨幣の必然性をば經濟の基本過程そのものから導き出さうとしたからであつた。即ち先づ第一に經濟の循環が無數の交換から成立してゐる限り、これらの各々の交換の一般的限界を考へるためには同じく一般的な計算貨幣が必要であると云ふこと、第二に現實の貨幣は右の計算貨幣を實現すると云ふ意味に於て經濟の循環と不可分であると云ふこと、この二つが主張の要點である。貨幣存在の論理的必然性を經濟の基本過程そのものから導き出すことが貨幣現象の理解を深める上に於て如何に重要であるかは今敢て述べる必要はないであらう。さうして吾々の貨幣の定義は一にこの點を表現しようとするものに外ならない。

1) 拙著、純粹經濟學、116—118頁參照。

然るに問題は正にこの點にある。貨幣の右の如き規定は果して貨幣の經濟內的必然性を論證するに足るものであるか。私見に對する高田博士の批判はこの點を中心として自ら二つに分れる。第一、交換に於ける一般均衡の成立は一般的計算貨幣(價值尺度)をまちて可能となるのではない。一般均衡は全面的な間接交換によつても成立し得る筈である。²⁾ 第二、假に一般的價值尺度が一般均衡を可能ならしめるとしてもそれを何故に貨幣と見ねばならないか。『假にかゝる價值尺度によつて一般均衡が成立するにしても、そこに一般的交換手段としての貨幣はない、その作用する餘地は殘されてゐない。なるほど貨幣はかゝる價值尺度としての機能をもつてゐる。けれども價值尺度として何物かが機能するところに必ず貨幣があるのではない。比較の尺度となるものは觀念的のもの現に所有せられてゐるものではない、一般的交換手段は必ず何人かによつて所有されてゐる。此間の架橋は後に説くが如くに困難である。』³⁾

かくて博士によれば貨幣についての價值尺度機能(私の場合の計算貨幣機能)と交換手段機能とが分離し得る二つの機能と見られる限り、價值尺度機能の優位を説くところの説明は成立し得ない。殘された道は逆に交換手段の優位を説くことのみである。一般的交換手段を豫想しない價值單位又は價值尺度なるものは貨幣概念としては存在せず、又逆に一般的交換手段の作用は價值尺度の存立を可能にする。⁴⁾ 従つてこゝでは價值尺度の機能が交換手段に先行する餘地は全く與へられてゐないのである。

明瞭を期するために博士の右の論點をいま一度私見にひき當てゝ見よう。博士によれば計算貨幣を實現する限りの交換手段を以て貨幣とするところの私見は二つの點に於て成立しない。第一、計算貨幣から交換手段として

2) 高田博士、前掲論文、55頁、59頁。
3) 高田博士、前掲論文、54頁。
4) 高田博士、前掲論文、47、58頁。

の貨幣への架橋が行はれてゐないこと、且博士によればそれは行はれ難いこと、第二、計算貨幣の存在は一般均衡の成立に必ずしも必要ではないこと、従つてこれに基いて貨幣の內的必然性を論證することは行はれ難いと云ふことこれである。吾々は茲で既に博士の問題の提出が吾々の表現の意味するところと多少の喰違ひのあることを述べておかねばならない。即ち博士の場合に於ては貨幣の尺度機能と交換手段機能との二つが云はゞ互に對立するところの二つのものとして比較せられてゐるのに對し、吾々の定義に於ては始めから交換手段としての貨幣なるものに注意が集中せられ、この貨幣なるものゝ經濟內的必然性を理解する徑路として貨幣の計算單位乃至は價值尺度機能が問題とせられてゐることこれである。吾々の場合に於ては計算貨幣と交換手段とは相並行するものでもなければ又相對立するものでもない。それ故に一方から他方への架橋と云ふことは博士の云はれるが如き意味に於ては問題とはならないものである。勿論かく云ふことは吾々が單にこの一點を指摘することによつて博士によつて提出された豊富なる問題群一切を迂曲しようとするものでは決してない。實際この點を強調することに依つて例へば兩説は交換手段の優位を主張する點に於て互に相一致すると云つて見ても問題の根本的な側面はこれによつて少しも救はれることにはならないからである。然しこの點の指摘は茲に提出された問題の根本が何處にあるかを見透すためには充分に役立ち得るであらう。即ち私見に於ては交換の手段たる貨幣は單なる交換の手段たることによつて經濟に必然的な存在をなすものではなくそれが計算貨幣を實現する限りに於てさうであるとするのに對し、博士に於てはこの貨幣の內的必然性が一般的價值尺度（計算貨幣）の機能を前提とすることなく單に間接交換の必然性を以て充分に論證せられるとされるのである。このことは先づ第一には全面的なる裁定さ

へあれば一般的均衡は成立すると云ふ博士の主張に現はれるところであり、又第二には一般的交換手段が常に價值尺度に先行すると云ふ説明に明なるところである。問題は一言にして云へば交換經濟に於ける貨幣存在の論理的必然性にかゝる。吾々は以下この點に注意を集中しつゝ議論を展開して行かう。

二

先づ貨幣の必然性を端的に間接交換の必然性から導き出す主張そのものを吟味しよう。これは云ふまでもなく博士の主張であると共にシュムペーターが『本質』に於て力説したところである。博士は『間接交換なくして一般均衡のあり得ぬことを認め、此意味に於て貨幣が便宜以上のものの結果であることを認め』られると共に直ちに『こゝまではワラス・シュムペーター・ヴィクセルの線に従ひたい』と附言して、⁵⁾この點を明にしてゐられる。

尤も博士にあつてはこれだけでは具體的の一般交換手段としての貨幣の必然性は尙盡されるものではなく『間接交換から貨幣に到達するまでには一定の事情を必要とし、此事情から貨幣が必然に導き出さるると見』⁶⁾られるのであつて、そこにシュムペーターとの重要な相違點があることを認めねばならぬ。即ちこの點を強調すると博士の主張は貨幣を直接に一般均衡から導き出すことを拒否することとなる。しかし吾々の目下の論點は更に一般的にむしろ間接交換と一般均衡との關係にあるのであるからこの點については暫く後の段階にゆづつて差支へないであらう。然らば吾々の貨幣本質觀は正に以上の如き間接交換説そのものへの批評から出發するものである。このことを吾々は先づシュムペーター説への吟味を通じて明にしよう。この場合シュムペーターを吾々の共通の出發點として採ることは行論を簡單にする上に於て利益があるであらう。

5) 高田博士、前掲論文、55頁
6) 高田博士、前掲論文、55頁

シムペーターが貨幣を以て單純、純粹なる間接交換の手段と考へ、この間接交換の必然性を以て同時に貨幣の必然性と考へることについては改めて詳説を必要としない。即ち彼は『本質』に於て『二種以上の商品が二人以上の個人の間に交換せられねばなくなるや否や、その目的が全部的或ひは部分的に今一度交換せんがための財貨獲得であるが如き交換行爲の發生を見るであらう。』かゝる交換行爲の對象となる財貨は何れもその限りに於て貨幣である。』と云ひ、更にかゝる間接交換、即ち『専ら再交換を目的とする財貨獲得の必要が起り得るであらうか』と云ふ問題に對しては『確にそれは起り得ると』答へ、進んでこれを説明して『寧ろ彼等は直接には unnecessary 財貨數量を、眞に必要な財貨と再交換するためにのみではあるが、獲得するであらうし、またさうせねばならぬ。たゞかゝる過程を通じてのみ效用極大存立のために要求されるかの價格間の比例が到達され得るであらう。吾々はかゝる場合が極めて頻繁に生ぜねばならぬこと、従つて間接交換が二種以上の商品の交換される各市場機構の必然的な要素でなければならぬことを直ちに知るのである。寧ろ間接交換なくしてはかゝる市場には何等の自由競争もあり得ず、間接交換は自由競争存立のために缺くべからざるものである、と云ふことが出来よう。それ故殆んど如何なる場合にも、狹義の「欲望」からでなく、専ら市場機構の技術的必然性から説明され得る一種または多種の財貨への需要が存在するであらうし、また存在しなければならぬ。』と述べてゐるのである。

私はシムペーターと共にかゝる意味の間接交換が必然であることを認め、従つて又かゝる間接交換の手段としての貨幣が經濟內的に必然であることを認めてゐる、しかし乍らかゝる意味の間接交換は果して貨幣の計算單位機能又は一般價值尺度機能なしに一般均衡を齎すものとして考へ得るか否か。茲に問題を見出し、茲に否定的

7) シムペーター、本質、邦譯、272頁
8) シムペーター、本質、邦譯260—261頁。

な答を見出すことによつて私はシュムペーターから、従つて又その限りに於て高田博士から離れるものである。

間接交換が『效用極大存立のために要求されるかの價格間の比例の到達』に必要であると云ふことは云ふまでもなく、一般交換均衡の存立に對してc、bの交換比率はc、aとb、aとの交換比率の比に等しいと云ふ條件が必要であると云ふことを意味するものであつて、ワルラスの所謂裁定の必要に外ならない。唯吾々の問題はかかる裁定を一般均衡成立の要件と認める場合に於てはそれは既に一般的價值尺度の存在を前提せねばならぬと云ふにすぎない。換言すれば一般均衡の成立のためには必ずこの間接交換の限界が確定せられねばならないのであるが、この限界の確定は一般的計算單位乃至一般的價值尺度の存在なしには考へ得られないと云ふにある。吾々はこれを直ちにワルラスに於ける裁定の説明について説明しよう。シュムペーターは少くともこの點についてはワルラスの考へ方をそのまゝに踏襲するものと考へられてゐるからである。

ワルラスは云ふ、『市場の完全平衡又は一般的平衡は任意の二つ宛の商品の一方を以て表はせる價格が、任意の第三の商品を以て表はせる夫々の商品の價格の比に等しくなければ、現はれ得ない。』いま商品(B)と(C)との(B)を以て表はせる價格をと $P_{b,a}$ すればこの條件は

$$\frac{P_{c,b}}{P_{b,a}} = \frac{P_{c,a}}{P_{b,a}}$$

を以て表はされる。若しこの條件が満たされず、 $P_{c,b} \neq \frac{P_{c,a}}{P_{b,a}}$ 従つて $\frac{P_{c,b}}{P_{b,a}} > \frac{P_{c,a}}{P_{b,a}}$ であるとすれば(A)(B)(C)の各所有者の或者は、(A)と(B)との直接的交換を、躊躇なく(A)と(C)、及び(C)と(B)との間接的交換に代へ、また或他の者は(B)と(C)との直接的交換を、躊躇なく、(C)と(B)及び(B)と(A)との間接的交換に變化せしめ、また他の或者は、(C)と(A)

との直接的交換を、躊躇なく、(C)と(B)及び(B)と(A)との間接的交換に變化せしめる。此間接的交換は裁定と呼ばれる。而して彼らは、かくして得らるる節約を、思ふがままに種々なる欲望に配分し、可成的最大量の満足が得られるやうに、或商品を補足倍加する。私共は、此最大満足の條件を示すことが出来る。それは、充されたる最後の欲望の強度の比が、裁定から生じた眞の價格に等しいと云ふにある。『故にもし、裁定の起らざらんことを欲し、市場に於ける二つ宛の商品の均衡が一般的均衡たらんことを欲せば、任意の二つ宛の商品の價格は、任意の第三の商品を以て表はせる夫々の價格の比に等しいと云ふ條件を入れて來なければならぬ。換言すれば、次の方程式を立てることが出来なければならぬ。』

$$\begin{aligned}
 & p_{a,u} = \frac{1}{p_{o,a}}, \quad p_{c,u} = \frac{p_{c,a}}{p_{o,a}}, \quad p_{a,u} = \frac{p_{a,a}}{p_{o,a}} \dots\dots\dots \\
 & p_{a,c} = \frac{1}{p_{c,a}}, \quad p_{b,c} = \frac{p_{b,a}}{p_{c,a}}, \quad p_{a,c} = \frac{p_{a,a}}{p_{c,a}} \dots\dots\dots \\
 & p_{a,d} = \frac{1}{p_{d,a}}, \quad p_{b,d} = \frac{p_{b,a}}{p_{d,a}}, \quad p_{c,d} = \frac{p_{c,a}}{p_{d,a}} \dots\dots\dots \\
 & \dots\dots\dots
 \end{aligned}$$

かくの如くにして合計 $(m-1)(m-1)$ 個の一般平衡の方程式がある。それには、互に逆なる價格の方程式 $\frac{n(n-1)}{2}$ が含蓄的に含まれてゐる。ところで、かく總ての價格を表はす所の商品は通貨 (numéraire) である。』

シユムペーターのこれに當る説明はワルラスとは稍々異なる設例を以て行はれてゐるものであるが、¹⁰⁾而もワルラスの裁定に關する説明とシユムペーターの間接交換に關する説明とが根本に於て同一の條件を指すことには疑はない。シユムペーターが間接交換の必然性から貨幣を導き出した説明の直後に『右に述べたところは我々以

前には(私の知るところによれば)唯一人の理論家即ち、ワルラスによつてのみ價格理論のうちで詳説された¹¹⁾と述べてゐるのは充分に之を説明するものであらう。しかし乍らワルラスの裁定の説明を踏襲したシュムペーターは果してワルラスの説明の全部を盡すやうに之を踏襲したであらうか。茲にはワルラスに於ても亦充分には規定せられてゐないと思はれる一つの點が残されてゐるやうに見える。

問題は裁定と一般均衡の成立との關係についてのワルラスの説明の言葉にかかる。即ちそこでワルラスは『若し裁定の起らざらんことを欲し、市場に於ける二つ宛の商品の均衡が一般的均衡たらんことを欲せば』と述べてゐるのであるが、この言葉は例へばシュムペーターの如く單に裁定さへ全面的に行はれるならば一般的均衡は成立すると解釋し得るであらうか。私は之をさうとは考へない。一體『裁定が起らないためには』と云ふ表現は多少曖昧ではあるが、それは尙最後の所論より見て明に二つのことを意味してゐる。即ち第一には裁定又は間接交換は一般にそれが有利なる限りは必ず行はれると云ふこと、第二にはこの間接交換が限界に到達したとき、換言すれば全面的な裁定によつて裁定によるところの利益が全く消滅する状態が到達したとき、同時に一般均衡の状態が到達すると云ふこと、これである。さうしていま一般均衡と裁定作用との關係、從つて又一般均衡と貨幣との關係を規定するに當つて特に重要なものは論點の第二であるが、この點を眼中において貨幣の本質を考へるとき吾々は決して之を以て單なる間接交換の手段乃至裁定の用具とはなし得ないのである。何故なれば一般均衡の成立のために裁定作用が限界に達したか否かを判斷するためには何等かの意味に於いて間接交換をも含めたる交換の全體を總觀せしめるに足る一般的な基準がなければならぬからである。ワルラスは之を單に「通貨」numéraire

と呼んだ。この通貨はもとより如何なる財であつても差支へはない。しかしその重要さは正に之によつて裁定作
用の限界を確認せしむる點にあるのであつてこの意味に於てワルラスの通貨たる機能を果すところの貨幣は決し
て單なる交換手段ではあり得ない。殊に沉んや各個の間接交換に於て別々のものではあり得ないのである。私は
ワルラスの通貨に於けるこの特色を指示するために特に計算貨幣と云ふ名稱を用ひた。かかる意味の貨幣はかく
てそもそも交換を一般に可能ならしめるもの、その意味に於て交換經濟社會の存立と同時に成立するものとして
の重要をもつものである。要するに貨幣を以て一般に間接交換の手段と見ても之を一般均衡の成立に結びつけて
考へる場合に於てはこの交換の手段は必ず一般的計算貨幣乃至は一般的價值尺度たる資格をまたねばならぬ。何
故なればそれなしには一般均衡の成立のために必要な裁定の限界は考へ得ないからである。吾々は茲で一般的價
値尺度機能の重要性を認識すると同時に單なる間接交換の全面的作用、或ひはザワツキの意味に於ては間接交換
の無限の連續によつて一般的均衡が成立すると云ふ見解と袂を分つ。間接交換のための一切の手段財を以て貨幣
であると云ふシュムペーターの見解はそれ自身誤りではないとしてもそれが一般均衡の成立との關係に於て必要
なる共通の標準を明示せざる點に於て又吾々の採らざるところである。

三

然らば進んでワルラスの「通貨」(numéraire)は直ちに貨幣の本質をつくすものであるか、若しこの通貨と云ふ
言葉が單に一般的計算單位たるのみならず、むしろ之を實現するところの交換手段と云ふ意味に解せられるなら
ば吾々は勿論之を肯定せねばならぬ。その場合にはそれは計算單位を實現する限りに於ての交換手段が貨幣であ

12) 高田博士、前掲論文、59頁、尙この點は既に栗村氏によつて論ぜられたところであるから評論を省く。栗村雄吉氏、交換に於ける貨幣存在の論理的必然性、93-94頁。

ると云ふ吾々の貨幣本質觀と完全に一致するからである。しかし乍らワルラスの通貨はそのまゝでは尙未だかくの如き内容をもつものとは考へられ得ない。それはむしろかかる内容に到達する一步手前のもの、即ち主として一般的價值尺度の機能そのものを強調したものと考へられねばならない。このことはワルラスが「通貨」(monnaie)に對して別に「貨幣」(monnaie)なる概念を用ひ、この兩者を屢々併立せしめ又對立せしめてゐることによつて最も明白に窺はれるであらう。通貨とはワルラスにあつては第一義的には單に總ての價格を表はすところの商品、換言すればその價值は從つて總ての他の商品の價值をはかるところの商品に外ならない。¹³⁾之に對して貨幣とは交換の媒介たる職分をつくすものである。さうして『通貨たる職能と交換の媒介なる機能とは異なる二つの職能であつて、兼ねられてゐても、明らかに區別せられなければならない。』¹⁴⁾かくてワルラスは「通貨」と區別された意味の「貨幣」をもち込むことによつて「通貨」にはむしろ安んじて一般的價值尺度たるの機能を強調し得たのであり、この意味に於てワルラス貨幣論の獨譯者が numéraire を Wertmassstab とし monnaie を Tauschmittel としてゐることが承認されるのである。¹⁵⁾吾々が先にワルラスの裁定の説明に於ては裁定の限界の確定、從つて又之が到達のために必要な一般價值尺度機能が強調されてゐると述べたのも亦この點を指すものに外ならない。然し乍ら若しワルラスの裁定の説明に於ける「通貨」がかくの如き意味に於て貨幣と並列し又對立するものならば、それは未だ吾々の意味する貨幣の本質をつくすものではないこと明白である。吾々の云ふところの貨幣の本質はかかる通貨を實現するところの交換手段であつて、その意味に於てはむしろワルラスの通貨と貨幣とを併せふくむものでなければならぬ。

13) ワルラス、純粹經濟學要論、手塚氏邦譯、181頁

14) ワルラス、186頁

15) Kerschagl u. Raditz, Walras Theorie des Geldes. S. 61.

尤もこの場合通貨の計算單位としての機能を重要視して、かくの如き機能を營むもの即ち貨幣であると規定するならば吾々は敢へてこれを非とする理由を見ないであらう。例へば栗村教授の貨幣本質觀はこの點に於て充分に徹底したものである。即ち教授はワルラスの裁定の條件を示す方程式と内容に於て同一なる方程式群11の必要を説明して云ふ。『この方程式11のそれぞれの式は、既に明にした如く凡ての財の價格は、よしそれが今問題とすべき特別の財を底としない時でも、この特別の財を底とするところの價格に關係せしめられて、この價格と一定の比を保たねばならぬことを要求する。この特別の財をワルラスは *numéraire* と呼ぶ。又吾々の貨幣と呼ぶところのものである。この方程式群11が一般均衡の必然の條件であることは、一方に於ては直接交換が行はれ、又他方には二つの又それ以上の部分市場間に於ける裁定によりて間接交換が行はれ従つて所謂交換手段の介在する場合と雖も、凡ての財の價格は特別の財即ち *numéraire* に關係せしめられ、これを以て表現せられた價格と一定の比を保たねばならぬことが、一般均衡に取りて必然であることを表示する。従つて、貨幣の存在が一般均衡に取りて必然的なことを證明するものである。¹⁶⁾』この一節は教授がワルラスの所謂通貨を以て貨幣の本質と見られる點を説明して餘すところなく、茲から教授が『貨幣の本質的機能を價格の一般的表現手段と見る』と云ふ歸結も一貫的に導かれてゐる。更に教授が如何に此の意味に於ける貨幣の本質觀を徹底してゐるかは教授が裁定と云ふ條件を以て『現在的である必要はない。潜在的のもので十分である。¹⁸⁾』とせられるに至つて極まる。茲に潜在的と云ふのはワルラスの用語を以てすれば裁定が云はゞ文書を以て *sur bonus* 行はれる状態に當るものであつて極端に云へば交換手段としての貨幣なるものを必要としないことになるのである。吾々はこの見方がワルラスの裁

16) 栗村教授、交換に於ける貨幣存在の論理的必然性、88—89頁。

17) 89頁。

18) 栗村教授、貨幣の根本機能に關する考察、144頁

定の條件そのものの解釋として必ずしも妥當であるとは思はない。何故なればこの裁定の條件は吾々の先に述べた所が承認される限り第一には裁定作用が有利なる限り現實に行はれることを意味するものだからである。さうして實際若しこの點に重點をおいて裁定の條件を考へるならば例へばシュムペーターが裁定の必然性から交換手段の必然性に進んだことは決して論理の飛躍ではないのであつて、¹⁹⁾ シュムペーターに於ては終に更に觸れるであらうやうにこの交換手段の一般性への論證が缺けてゐることこそ缺點であるとなさるべきである。²⁰⁾ 唯、それにも拘らず一方に「貨幣」をひかえて之と並行的に說かれる「通貨」の解釋としては栗村教授の如き解釋は優に成立し得るものであつて、むしろこれを斯く解釋することが「貨幣」に對する「通貨」の本質を把握する所以であらう。しかし乍ら通貨の説をここまで追及してくれば斯くの如き意味の通貨が直ちに吾々の云ふところの貨幣の本質を盡すものでないことは敢へて多言を用ひずして明である。蓋し、既に屢々述べた如く吾々の意味するところの貨幣はかかる通貨を實現する限りに於ての交換手段そのものであつて云はゞ通貨の作用そのものではないからである。私はかかる貨幣觀がある意味に於てワルラスの通貨と貨幣とを併せふくむものであると述べた。この意味を明かにするためには進んでワルラスの「貨幣」について述べなければならぬ。

四

ワルラスに於ては計算貨幣としての「通貨」に對して交換手段としての「貨幣」が並べ說かれてゐること前述の通りであるが、然らばこの交換手段としての貨幣は如何なる契機によつて經濟の過程の中に導入せられてゐるか、之に對するワルラスの答は『純粹經濟學要論』に於ける『流通及び貨幣の理論』である。こゝで彼は凡そ次の如くに

19) 栗村教授、貨幣の根本機能に關する考察、144頁、參照。

20) 高田博士、前掲論文、52頁。

述べてゐる。²¹⁾

即ち均衡の成立のためには一般に一經濟期間に提供される生産用役の價值と同じく一經濟期間に生産される生産物の價值とが相等しいことを要するのであるが、流通の理論をたてるためには更に次の様な條件を導き入れる必要がある。それは均衡の原理的な成立と共に直ちに開始され且つ觀察期間の間繼續するところの生産用役並びに生産物の引渡しは通貨による評價に従つて貨幣を以て行はれると云ふことこれである。『豫備的な模索が文書によつて (sur bons) 行はれた後に、一度均衡が原理的に成立するや否や、生産用役の引渡しは直ちに開始せられ且つ一定の仕方に於て考察期間の間繼續するであらう。通貨で評價されたこれら用役の支拂は定められたる條件に於て貨幣を以て行はれることとなる。生産物の引渡しも同様に直ちに開始せられ、且つ一定の仕方に於て同様の期間の間繼續せられるであらう。通貨で評價せられたこれら生産物の支拂も亦定められたる條件に於て行はれることとなる。』即ちこの條件をさへ導入すれば、消費者の側に於ても生産者の側に於ても各期間に於て生産物又は貨幣から成るところの一定量の豫備 (approvisionnement) をもたねばならぬことは直ちに明白となるであらう。この一定の豫備はワルラスによつて流通資本 (fonds de roulement) と呼ばれるものであつて、貨幣の價格はこの流通資本價格一般と共に先づかゝる流通のための豫備の用役の價格として決定せられ、それは更に貨幣が貨幣たる限りその數量の反比例函數として成立することが明にせられるのである。

吾々はいまこの貨幣論の展開を追ふてワルラスに於ける貨幣數量説の注目すべき内容に深く立入る餘裕を有しない。吾々にとつて茲での問題は流通の理論に於ける貨幣導入の契機が如何なる意味に於て貨幣の存在と結びつ

21) Walras, *Éléments d'économie politique pure*. p. 298-299.

いてゐるにかゝる。注意を集中して以上の貨幣の説明を見れば、吾々は容易に交換手段としての貨幣の存立を必要ならしめるものが茲では豫備の用役を擔ふものとしての流通資本の存在に、従つて又更に溯つて云へば、豫備の存在をして抑も必要ならしめるところの生産と消費との分化と云ふ事情に求められてゐることを認めるであらう。實際ワルラスに於て均衡は原理的には一應かゝる貨幣の存在なしに成立する、しかし一旦成立したる均衡が現實に進行するためには、生産と消費とが領域を異にする二つの市場として問題となる限り、云はゞ兩者をつなぐ一環として貨幣の存在に導かれなければならないのである。讀者はかゝる貨幣の解釋が一面に於て貨幣價值の數量說的把握に至らしめると共に他面に於て後に例へばシムペーターによつて強調せられたやうな指圖證券的貨幣觀に導くものであることを容易に看取せられるであらう。その點に就いては私が後段で更に觸れたいと思ふところである。しかし茲ではワルラスの「貨幣」が何よりも生産的用役と生産物との不斷の交換過程を媒介する要因として經濟の中にとり入れられてゐる點に注目するに止め、直ちに斯かる「貨幣」が前述の「通貨」と如何なる關係に立つかの中心問題に入らう。

不幸にしてワルラス自らの敘述に於ては兩者の關係は充分に明白にせられてゐない。一言を以てすれば「通貨」と「貨幣」とは云はゞ並列的に説かれてゐるのみであつてこの兩者の關係には殆んどふれられてゐないのである。このことを最も明に示してゐるのは恐らく一八八六年の『貨幣論』の敘述であらう。こゝでワルラスは次の如くに述べて通貨と貨幣との必要を單に並べ説いてゐる。曰く『交換と生産とについての自由競争のメカニズムに關する上述の敘述から、第一には生産用役の市場たると生産物の市場たるとを問はず、よつて以て他の諸商品の價

格を呼稱すべき一商品、或はその價值によつて他の諸商品の價值を測るべき一商品（即ち「通貨」）をもつこと、…又第二には、生産用役の市場に於ては人々が之に對して生産用役を賣却し生産物の市場に於ては人々が之を以て生産物を購買するが如き、從つて「貨幣」として役立つところの一商品をもつことの必要が充分明瞭に生れて來る』と。さうして兩者の關係については全く交換當事者の便宜と云ふ觀點から『通貨は貨幣でなければならぬ』²³⁾ *numéraire doit être monnaie* と云ふことが云はゞ一般的な準則として掲げられてゐるにすぎない。主として貨幣の理論の展開を試みたところの『要論』（一九〇〇年）に於てはこの二つは爾く簡單には並列せられてゐない。特に「貨幣」の理論だけが流通方程式の問題として純粹經濟學體系の第四の部分を構成してゐること以上に見た通りである。しかし乍らこの場合に於ても問題とせられる貨幣は通貨を以て評價せられた生産用役乃至生産物の交換に必要な手段と述べられてゐるのみであつて兩者の關係に至つては依然としてそれ以上の立入つた考察が行はれてゐない。この事情は一應はワルラスの貨幣論が所謂商品貨幣説をとるものであると解することによつて理解を得るやうに思はれる。しかし乍らワルラスの「貨幣」の説が究極に於ては純然たる指圖證券説への展開を指示してゐることによつて明かな如く、兩者の關係の問題は單にかゝる解釋によつて消滅すべきものではない。このことはワルラスが右の貨幣理論の展開に當つて先づそれ自ら固有の價值を有しない紙幣の場合から分析を始めてゐることによつて窺ひ知られるところであらう。²⁴⁾ 要するに吾々はワルラスの説明から直接に「通貨」と「貨幣」との理論的關係をきくことが出来ない。殊に況んや「通貨」から「貨幣」への具體化の過程の如きは全く問題として上程せられてゐないのである。

23) Walras, *Théorie de la monnaie*, p. 84.24) Walras, *Éléments*, p. 303.

そこでワルラスに於けるこの説明をそのまま交換經濟に於ける貨幣の必然性と云ふ問題に結びつける場合には其處に豫期せられる答は一應は次の如き形をとるであらう。即ちワルラスに於ては貨幣の必然性は直接に裁定又は間接交換の必然性から生ずるものではない。裁定の條件が必然的に生み出すものは「通貨」の必然性であつて「貨幣」のそれではない。現實の交換手段としての貨幣は之に別の條件が加はることによつて、換言すれば生産用役の市場と生産物の市場とが互に相分離し、従つてこの兩者の引渡しに何等かの媒介手段を要すると云ふ新なる條件の導入によつて始めて理論的に成立するものであると。(因にこの議論の立て方は高田博士の私見並に栗村氏説に對する批判と同一の形式をとるものである。) しかし乍ら私はかゝる解釋がワルラスの解釋として先づ成立しないものと考えへる。その理由は前節で述べたやうにワルラスに於ては「通貨」と「貨幣」との理論的關係を考へようと云ふ要求が始めから存在しないからである。直截に云へばワルラスの貨幣論に於て説明すべきものとして目に映つたものは何よりも先づ現實の交換手段であり、而もそれ自ら通貨を實現するところの交換手段であつた。このことに自由競争のメカニズムの説明から一方に於ては「通貨」他方に於ては「貨幣」の必要が直ちに分明となると述べてゐる前掲の言葉によつて明かであらう。而も價值尺度としての「通貨」の機能と交換手段としての「貨幣」の機能とが完全に別個のものであることはワルラスの夙に認めるところである。そこでワルラスの説明の順序は先づ現實の貨幣の作用の中から「通貨」の機能を取り出してこれを原理に於ける均衡成立の條件として理論の中にとり入れると共に、「貨幣」即ち交換手段としての機能は原理としての均衡を現實に於ける均衡へ近づかしめる場合の、即ち後の段階の理論として展開したものと考へられるのである。實際若しさう解釋するのなければ吾々は第一に裁定

の條件に於て何故に特に一般的價值尺度機能のみが強調せられてゐるかを理解することは出来ない、何故なればこの裁定を以て現實に行はれるものとする限り、その手段の現實性に目をおほふことは本來許されない筈だからである。又斯く解釋するのでなければ吾々は第二に「貨幣」の導入の條件を充分に活かすことが出来ない。何故なれば茲に貨幣導入の條件として挙げられるところは實は交換と生産との均衡の一般的前提をなしてゐるところの條件であつて敢て貨幣の存在のため特殊の條件ではないからである。換言すればワルラスがこの條件をいま特に貨幣に關して持出すのは一面に於て流通經濟の一般的前提を「貨幣」のために強調すると共に、むしろ之によつて交換手段としての貨幣の價值の具體的な決定に進まんとする目的をもつと見るのである。かくて吾々はワルラスに於ける貨幣の問題が「通貨」から「貨幣」へと云ふ説明の順序にも拘はらず、本來現實の交換手段としての貨幣から出發するものと見ることによつてむしろ一元的に解釋し得るものと考へる。私が貨幣の本質を以て計算貨幣を實現する限りに於ての交換手段であると云ふのもワルラスに對する右の解釋に根據をおくものである。